

医療の未来を考える：国民目線と医療目線の両面で

◎真野 俊樹¹⁾

中央大学大学院 戦略経営研究科／多摩大学大学院 教授¹⁾

身近になった医療分野

病院や医師というと昔は「聖職」という言葉があったように、世の中のために極めて重要なことをしてくれている特殊な場所や仕事というイメージがあったと思います。近年そこが変わってきています。

理由のひとつはインターネットの進歩でしょう。特にインターネット上で、様々な情報が揭示されるようになりました。紙の印刷物だと印刷するためにコストがかかるので、人気がない分野の記事というのはあまり掲載されませんでした。作成コストが安いために、一部の人のみ関心が高いようなテーマでも、記事として成立します。言い方を変えれば、マス広告のようなものではなく、極めて個別性が高いということになります。

医療や病院、医師といった分野のテーマでも多くの記事が目に触れるようになり、こういった職業が特殊でなく、ある意味わかるようになってきたわけです。昔は友達がいなければ医師の様子は分からなかったわけですが、今はネットを見ればいくらでもそれがわかります。

もうひとつはコロナ禍です。先ほど話してきたことと裏腹ですが、コロナによって人々が医療情報を気にするようになりました。国の言うことを聞いていけばいいのか、専門家のことを聞いていけばいいのか、非常に悩ましいことであるということがわかってきたわけです。簡単に言えば、情報がなければ専門家も常に正しいことをしているわけではないということが分かってきました。そうすると、個々人の判断が重要ということになります。ポイントは先ほどと同じで、医療や付随する知識といったものが身近になってきた反面、自分で判断をしなければならなくなった、とも言えましょう。

そうすると、自助につながる個々人の判断が重要ということになります。ここでのポイントは医療が身近になったということと、情報量が多くなり自分で判断しなければいけなくなったということです。

国民にとっての変化

最初に、情報量が多くなったことについて考えてみましょう。実は、情報量が多くなるという事ばかりではありません。判断をするために、多く考えなければいけないので疲れてしまうといったことが起きます。つまり、皆さんが調子が悪かったりした時に色々調べないとうまくいかなくなったりします。昔でしたら近くのお医者さんに行けばそれで事足りたのですが、今だと、どこの医者がいいかどうかをネットで色々調べようといった、ある意味では面倒くさいことが発生するわけです。

もう一つの、医療が身近になったということは、今日の主なテーマである医療の未来ということにつながります。

医療をめぐる環境変化

医療に起きている、あるいは起きるであろう変化はどのようなものでしょうか？ まず、環境面から考えましょう。

世界に円安、日本にもそれに伴って物価高といった、大きな変化が訪れています。直接こういった変化が医療機関に影響を与えている面もあります。エネルギー高、資材高による経営困

難といったものがそれでしょう。

その辺りをどのようにして対応していくかというのも大きな課題ですが、5年10年のスパンで見ると、もっと大きな変化が日本の医療界に起きるのではないのでしょうか。従来、医療分野は社会保障の一環、ということで、予算が確保されていました。しかし、予算がない国では、例えばコロナを疑われてもPCR検査を有料で行っている国もあるのが現実です。日本も、防衛費増額、国債の償還の困難化などを抱えており、今まで通りにやっていけるのでしょうか。そこで求められるのが医療機関の効率化と、国民の自助です。自助というと、国から見捨てられたような感覚もあるかもしれませんが、個別性につながります。

医療の未来と日本

実は政府も医療DXということで、医療の効率化を進めようとしています。これはどちらかといえば病院など医療提供側からの変革です。さらに、医療が身近になり、かつ個別性の強い対応を、国民や消費者が望むようになるとうどうなるか。やはり、インターネットと医療分野の融合ということになるでしょう。

医療界のオンライン診療は遅々として進まずといったところですが、Z世代などと言われる若い世代には着実にオンラインは浸透しており、医療界もその変化に無縁ではないと思います。いくつか例をあげれば、この4月から実行されるようになっているマイナ保険証の導入、2023年1月からの電子処方せんなどもそうでしょう。

別の変化としては、かかりつけ医療の在り方について様々なところで議論されています。たとえば、薬局には薬を渡すというモノの流通の面と、薬の情報を伝えるという情報流通の2面があるわけです。そのために、モノ（薬剤）の流通業全般をすべてが直接ではないにせよ、徐々にAmazonのようなインターネット企業が行う未来も想定されないわけではありません。

インターネット時代における医療の変化というものを、今後5年10年のスパンで我々は経験していくことになるのではないのでしょうか。